

## 中村地平『マライの人たち』の南方民族認識

阮文雅

東吳大學日本語文學系

### 摘 要

1941 年年底，中村地平懷著深刻的不安受軍部徵用前往馬來戰線。1942 年幾乎整整一年，隸屬於日本軍的宣傳班於昭南島（現新加坡）及吉隆坡執行文化工作任務。宣傳部的文化工作任務不消說自是為軍部從事宣傳，致使當時徵用作家的作品也存在著殖民地主義的相關前提。中村地平除了在戰地從事宣傳方面的文化工作，也被要求撰寫現地報告向日本內地反向宣傳。中村地平曾以台灣原住民為題材，書寫「長耳國漂流記」「霧之蕃社」等眾多作品，其中多可見滿含善意與憧憬的目光。當他轉而面對南方原住民時，究竟是懷著什麼樣的心緒執行任務的呢？本論文所探討的文本『馬來的人們』，是中村地平唯一將現地報告收錄出版的作品集。閱讀文本後發現，作品的確周到地執行了宣傳任務，也刻畫了南方民族對日本民族的憧憬與善意，側寫出日本人站在自民族中心主義的優越性位置俯瞰著南方民族的姿態。但是，書寫中儘管深刻交織了殖民地主義，卻又隨處可見敘事者的觀察距離。本稿將詳細分析文本，探索以多層面向隱於其中的南方民族認識。

**關鍵字：**中村地平、馬來的人們、南方徵用作家、昭南、吉隆坡

## 中村地平『マライの人たち』からみる南方民族認識

阮文雅

東呉大学日本語文学系

### 要 旨

一九四一年、中村地平はマライ戦地へ赴き、一年間にわたって、日本軍の宣伝班に属し、任務を遂行した。宣伝班の任務が軍のプロパガンダであるのは自明であったが、彼ら徴用作家の作品にも、当然ながら植民地的文脈が前提として介在していた。

中村はかつて台湾原住民に対して善意と憧憬の念を抱きつつ、彼らを題材として、「長耳国漂流記」、「霧の蕃社」など数多くの作品を執筆した。そのような中村が南方民族に対し、どのような思いで任務を遂行したのか。単行本『マライの人たち』は、中村地平にとっての唯一の現地報告集である。その作品群を読み進めていくと、それらが周到な宣伝任務の遂行として書かれたものであり、南方民族に対する指導的な立場に貫かれていることが分かる。しかしながら、その一方で、描写の中には植民地言説にコミットしながらも、それと矛盾するような個所も随所に見られる。本稿では、それらの矛盾を追って、彼が南方民族に対してどのような認識を持っていたのかを探っていくことにしたい。

キーワード：中村地平、マライの人たち、南方徴用作家、  
昭南、コアランポー

## **Profile the people in Southeast Asia based on “*Malay no hitotati*” of Nakamura Chihei**

Juan, Uen-Ia

Assistant Professor, Department of Japanese Language and Culture,  
Soochow University

### **Abstract**

In the end of 1941, Nakamura Chihei headed to the Malaya Battle with deep uneasiness. He joined the promotion team of Japanese army and dedicated as a cultural worker in Shonan (Singapore) and Kuala Lumpur. The so called duty is to propagandize for the military headquarters, therefore the artworks of dispatching writers filled with the premise of colonialism.

This essay discusses the text “*Malay no hitotati*” which is the only one archive that Nakamura Chihei published his short on-site reports. However, the colonialism was profoundly described in the book, the contradiction to the colonialism was expressed all over the article. This manuscript is to introduce Nakamura Chihei’s on-site reports, and explore his impression toward the South nationality.

**Keywords:** Nakamura Chihei, “*Malay no hitotati*”, Writers Sent to the Southern Front, Shonan, Kuala Lumpur

# 中村地平『マライの人たち』からみる南方民族認識

阮文雅

東呉大学日本語文学系

## 1. はじめに<sup>1</sup>

1941年10月、日本帝国は文化人に適用する徴用令を頒布し、文化人の報道班員としての徴用を決定した。当時文壇に向けて「南方的文学」の良さを疾呼していた<sup>2</sup>中村地平にも徴用令が下り、1941年12月2日、大阪から「アフリカ丸」で出発し、シンガポール陥落の翌日2月16日、シンガポール市内に入った。現地着後すぐに「昭南タイムズ」<sup>3</sup>新聞社でのインド語新聞の指導を命じられた。三カ月後、中村はクアラルンプールに宣伝支部長補佐として赴任した。同年12月、約1年の徴用を終え、台湾の高雄経由で日本に帰還した<sup>4</sup>。

本稿で取り上げる作品『マライの人たち』は、徴用時に現地で発表した作品に、日本に帰還してから執筆した作品を加え、

---

<sup>1</sup>テキストの引用は『マライの人たち』（文林堂双魚房 1944年3月）による。引用では、旧漢字を新漢字に変え、ルビは適宜省略した。また、現代仮名遣いに改めた。作品は差別語を含んでいるが、本稿ではそのまま引用している。なお、本研究は国科会専題研究 98-2410-H-031-057-による研究成果の一部である。

<sup>2</sup>中村地平「南方的文学」（『知性』1940年9月）を参照されたい。

<sup>3</sup>英文表記は「THE SYONAN TIMES」である。

<sup>4</sup>中村地平の徴用年譜は、前田貞昭「井伏鱒二・南方旅程年譜」（神谷忠孝、木村一信編『南方徴用作家』世界思想社 1996年3月）、及び中村地平作品内の記述などを参考にして作成したものである。また、徴用作家としての中村地平についての先行研究には、岡林稔『「南方文学」その光と影』（鉾脈社、2002年2月、pp.220-225）の中で小説「支那娘ジン」に対する示唆に富む分析がある。

1944 年 3 月に発行した単行本である。十八編が収録され<sup>5</sup>、それらはすべて南方徴用に関わる作品である。中村は後記で徴用作家としての一年間、現地で執筆したものは「比較的に少い」と述べ、また帰還後も「帰還作家の中でも、僕は最も仕事をしなかった一人にちがひない」と自省している。現地にいる間、「宣伝班員的な仕事が多忙だった」し、「僕は一種の焦燥を感じたのは事実である」といい、帰還後は「出脚が鈍いたち」だからと弁解している。

しかし、実際に南方に赴いて現地の生活を経験することができたにもかかわらず、南方文学の確立を声高に主張してきた中村地平がなぜ「比較的に少い」作品しか執筆せず、帰還後も「仕事をしなかった」のであろうか。中村の文学的指導を受けたことのある上原和も、「つとに南方文学を提唱し」た中村がなぜ「千載一遇の戦争体験、南方体験」<sup>6</sup>を作品化しなかったのかと疑問を投げかけている。本稿は、この疑問を出発点に『マライの人たち』を分析することで、徴用作家中村地平の南方民族に対する認識を明らかにする。そして、そのうえで、徴用先における日本の植民地言説の体験が、南方文学を確立せんとしていた中村の意気込みにいかなる作用を及ぼしたのかを再検討する。

---

<sup>5</sup> 収録された十八編は、「シンゴラまで」「佛寺の尼僧など」「サニー」「森の中の歌」「敗残の敵」「獅子の島は屈服せり」「印度人記者」「印度人の友」「ミス・エレシイ」「にせ王子」「コアランポーの町」「マライ・汽車・道路」「馬來人サーラム」「マライの女達」「印度独立とマライ」「支那人リオン」「梁兆鴻のこと」「帰還の感想」である。

<sup>6</sup> 上原和「哀しき人」『竜舌蘭』1963 年 12 月 p33

## 2. 文化工作

南方徴用作家の任務は、『新生南方記』にしたがえば、「我が南方建設の着々たる進捗状況と原住民の協力ぶりを感知せしめ、敵国民をして秘かに我が実力を畏怖するの念を懐かしめること」<sup>7</sup>であった。すなわち、現地での国威宣揚と民心の収攬、そして内地に向けては戦意を高揚させるものでなければならなかった。

### 2.1 国威の宣揚

『マライの人たち』は、「帰還の感想」を除けば、淡々と現地での見聞を記録的に語るものと、幾つかの特定の異民族を取材したものとは大きく分けられる。中には、プロパガンダの任務に深く関与している記述も随所ある。「既に読者は新聞で知ってゐるにちがひないが、マライ人が、さういふ風に男ばかりではなく女までも、日本の軍隊に厚意を寄せ、毛唐に反感を抱いてゐるさまは大変なものであった」<sup>8</sup>などの記述が出ている。「印度独立とマライ」<sup>9</sup>において、インド人にとって「東條首相」と「チャンドラ・ボース」がともに英雄であると紹介されていること、繁華街の風景、道路の整備、汽車復旧の速やかであったこと、教養ある華僑の娘達の間で流行語が「東亜共栄圏」になっていたことなどであり、そこには植民地言説の文脈が盛り込

---

<sup>7</sup>中村武羅夫編「凡例」『新生南方記』北光書房 1944 年 4 月 p3

<sup>8</sup>「マライの女達」『マライの人たち』文林堂双魚房 1944 年 3 月 p207

<sup>9</sup>「印度独立とマライ」『マライの人たち』文林堂双魚房 1944 年 3 月 pp.221・P230

まれている。また、

とくに当時、「対南方施策要綱」によって、南方占領の主要の目的は「自給自足経済態勢」の確立と「英国勢力の衰滅を図る」ことと設定され<sup>10</sup>、宗主国イギリスからの独立を図るインド国民軍に力を貸した。そのためか、東南アジアの独立を目指して、宗主国からの解放に協力すると言いながらも、この作品の中に「独立」のことが出てくるのは「印度の独立」のみである。このことは、当時インドの独立を支持するとの政策を出している一方で、南洋諸民族の独立は当分支援しないという軍部の政策とは無関係ではない。『南方占領地行政実施要領』の第八条に明白に記載してあるように、「原住民ニ対シテハ皇軍ニ対スル信倚関係ヲ助長セシムル如ク指導シ、其ノ独立運動ハ過早ニ誘発セシムルコトヲ避クルモノトス」<sup>11</sup>と、現地国の独立運動を早期に誘発しないようにとされていたのであった。

中村地平はプロパガンダの任務として、植民地言説を作品に取り込んだ。これらの作品は、中村の「記録的」という発言に示されるように、銃後の大衆に戦争の実相を匂わせるが、それと同時に語り手「僕」を見つめている作者中村地平の姿が浮上してくるのである。

## 2.2 民心の収攬

---

<sup>10</sup>原四郎編『戦史叢書 大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯』第3巻朝雲新聞社 1973年10月 p338

<sup>11</sup> 原四郎編『戦史叢書 大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯』第5巻朝雲新聞社 1974年8月 p420

新しい土地を占領し、異民族を統治しようとする際、占領国にとって最も大きな課題となったのは現地民の抵抗であろう。

「佛寺の尼僧など」では日本軍も「民心の収攬」を最も重視していることが明瞭に描き出されている。仏教の寺である洞穴の入口に、軍の「民心ノ収攬ハ宗教ノ保護ニ在リ、本山ハ良民之修道場ナルニ付キ、保護セラレタシ　〇〇〇」という貼り紙がしてあったという<sup>12</sup>。

また、使用人を雇う際は、徴用作家までも民心の収攬に気を遣わなければならなかった。作品「サニー」によると、使用人から日給七十銭との要求を出され、「朝、昼、晩の食事時にだけ三度、僕たちの家にやつてきて皿を洗ったり室内を掃除したりするぐらゐが精精の彼には、高給すぎるかとも思はれた」にもかかわらず、「日本の軍隊は、土地の民衆に対して苛酷であると思はれるのは、僕たちとしては大変にいやであつた。彼の申し出の条件通りで、よろこんで、僕たちは彼を雇つた」<sup>13</sup>という。

さらに、使用人の「マライ人」が日本軍に協力し、慕っている様子も示され、現地の「マライ人」が使用人としてであっても支配階級に近づくことは、「ひどく得意さうであつた」と意気揚々の様子が描写されている。ただ、それもお小遣いをあげているからだと同時に「マライの女達」で説明されている。

僕たちが使つてゐた自動車の運転手は、マライ人であつた。

彼に対しては、軍から勿論給料が支給されてゐたが、時折

---

<sup>12</sup> 前掲書、中村地平「佛寺の尼僧など」 p20

<sup>13</sup> 前掲書、中村地平「サニー」 p32



り僕は彼に僅かばかりの小遣ひをやることにしてゐた。そのことを彼はたいへん徳として居り、僕に「マスタア、マスタア」と言つて、なつてゐた。<sup>14</sup>

使用人の得意気な様子は、そのまま日本軍の得意げな様子を反映する。権力を握っているからこそ、原住民が日本軍に多大な好感を持って追従していることが明らかである。

### 2.3 現地の建設

内地に向けた宣伝の一環として、現地建設の宣揚も徴用作家の使命の一つであった。日本に戻ってから執筆した随筆「マライ・汽車・道路」では、昭南の道路の整備と、輸送線の復旧に懸命に取り組む日本軍の必死な姿を紹介している。そして、現地人がそれに協力する様子も周到に書き込んである。

マライの作戦で、現地人が皇軍に協力した多くの例は、読者はすでに新聞や雑誌で承知してゐるにちがひないが、鉄道の場合でも同断であつた。既に作戦中行くさきざきの停車場で、現地人が、日本の兵隊といつしよに、列車の運転に付随するさまざまの技術的な仕事に従事してゐる姿を、僕たちは見かけた<sup>15</sup>。

しかし、この随筆の末尾では、東京と昭南の間に直通列車を開通させる計画を紹介し、「一部の現地人知識人たちは、そのニュースが新聞に発表されたとき、その計画と日本文化の水準の

---

<sup>14</sup>前掲書、中村地平「マライの女達」 pp.208-209

<sup>15</sup>前掲書、中村地平「マライ・汽車・道路」 p151

高さを結びつけ、日本の国力を賞めそやすことを忘れなかつた」と幾分突き放した態度で語っている。さらに、タイから英領マライに入った時「文字通りに坦々たるドライブ・ウェイ」の様子を、「ゴム園の手入れが、とたんに良くな」り、「道路が見ちがへるくらゐ立派にな」り、「一千百余キロといふ長い間、この道路は一分の隙もないほどに舗装されてゐるし、カーヴにはゆるい傾斜が施されてあつて、ハンドルが切りよくなつてゐるし半哩ごとには英字でもつて里程標までもたてられてある」といささか露骨にイギリスの植民地建設を賞めるかのように描写している<sup>16</sup>。

さらに、「大東亜共栄圏」というスローガンは現地民に繁栄を約束したにもかかわらず、イギリスが敗退した後、現地はたちまち仕事難に陥った。作品の中に幾度となく、現地の人々が「日本人」を見た途端に仕事を求める様子が描写されている。イギリス政府の代わりに現地を占領した「日本人」の支配者としての権力は無論示されるが、同時に現地の日本軍が引き起こした混乱の様子も明瞭に示されている。

物価が高騰して、現地の人々の生活が戦前より一層難しくなったことを、「支那人リヨン」では、新聞社の助手として雇ったリヨンをして、給料が戦前の百六十円から今の六十円に下がったと語らせている。

宣伝班員の現地人との会話に託して、当時の宣伝班が漏らしてはいけない現地の実相を明らかにしている。作中人物に「近

---

<sup>16</sup>前掲書、中村地平「マライ・汽車・道路」 pp.146-147

頃物価が急に高くなったものですから……、わたしの家内は英語が話せないので、支那語の新聞を読むのを楽しみにしているのですが、定価五銭の新聞が、町では一枚五十銭もするんです」<sup>17</sup>と言わせているのは、日本軍が進駐した後、人民が失業して、物価が高騰している実態を示すものだったのである。

## 2.4 日本への憧憬

「マライの女達」の中では、現地の教養ある華僑女性たちが日本文化への興味、憧憬を抱いている様子が描写されている。

「生きてゆくことに敏感な彼女たちの、日本語習得に対する熱情には驚くべきものがある。彼女たちがお茶を習ひ、生花を覚え、日本語自由に操る日はさして遠くはないであらう」<sup>18</sup>。

しかし、見逃すことができないのは、その「熱情」とは時局の流れに合わせて「生きてゆく」ための方便であると示されていることである。この点を意識していた「僕」は、「とにかく現地人の日本語に対する熱心さには、驚くべきものがある」<sup>19</sup>と述べる一方で、「被支配階級の、生きてゆくための伝承された習性が、彼らをして、言葉の重要性を認識させてゐるためであらう」<sup>20</sup>と、言語と権力の関係を明瞭に指摘している。言語を習得しようとする情熱は、権力に屈して追従する側面を有するものである。現地の人々の日本文化を慕っている様子は、生き

---

<sup>17</sup>前掲書、中村地平「支那人リヨン」 p242

<sup>18</sup>前掲書、中村地平「マライの女達」 p214

<sup>19</sup>前掲書、中村地平「マライの女達」 p214

<sup>20</sup>前掲書、中村地平「コアランポーの町」 pp.143-144

ていくために時局に迎合するようなもので、戦争が生んだ虚像の一つであることを、中村は隠すことなく書きつづった。

### 3. 南方民族の描き方

「マライの人たち」において、マライにいる現地人は「マライ人」、「インド人」、「支那人」に分けて描写されている。多民族の東南アジア占領を達成するため、帝国政府は「大東亜」という「幻の共同体」を打ち出し、民族協和を唱えていた。しかし、実は南方民族に対して、日本軍部はそれぞれ異なる政策を用意し、その方針に沿って徴用作家は現地で現地人に接した。

これらの印度人の多くは、大変善良であるらしい。それは支那人の一部、ある狡猾な華僑たちとは較べものにならない位である。また、彼らのある者には深い教養があり、知識慾にも燃えてゐる。民族的に言つて、既に半ば去勢されてゐるやうな馬來人とは、その点可なりちがつてゐるやうに感じられる。<sup>21</sup>

ここでは民族が分節化され、「去勢され」た「マライ人」と「狡猾な華僑」が排除される一方で、「インド人」が特権化されている。このような特定の原住民を特権化して、「支那人」を周縁に排除するような描き方は、一見当時のシンガポールでの華人政策と同調するものであった。しかしながら、中村地平は「狡猾な支那人」を描く一方で、他にも二作品、「支那人」を題材にする作品を書き綴っている。管見のかぎりでは、当時の厳しい華

---

<sup>21</sup>前掲書、中村地平「印度人の友」p100

人政策の下に、マレーに赴いた徴用作家が作品で「支那人」を描くことはごくまれである。だが、『マライの人たち』の中に、「支那人リヨン」、「梁兆鴻のこと」の二編では、「僕」が徴用時期に「支那人」との間に結んだ深い友情が詳述されている。

シンガポール侵略の時、中日戦争の影響で抗日の華僑義勇軍が勇敢に戦ったこと、そして伝統文化を豊富に持っている華僑が、日本帝国にとって都合な、「文明」対「野蛮」という植民地言説の図式に対して、雑音を生じさせる可能性を持っていたのであろう。当時の軍部は厳しい華人政策をとり、南方民族を加害者／被害者の関係性として分節化し、「侵略者」のレッテルを貼り付けようとした。

中村地平が「長耳国漂流記」で、台湾出兵の際の「生蕃」を「支那人」「熟蕃」の圧迫から解放するという「日本人」の使命感を描き出した。南方においては「支那人」を非難の対象とする言説を繰り返した。これら同質性のある使命感と「支那人」非難とによって、日本は巧みに侵略者、圧迫者の列から自らの身を引かせることになる。

### 3.1 「マライ人」

「マライ人」は共通の楽天的なイメージで描かれている。「サニー」という作品において、サニーは掃除と料理役であるが、「馬來人サーラム」のサーラムは運転手である。また、「森の中の歌」の中で、ウクレレを弾きながら即興民謡を歌うアブバカは駅員の仕事をする「詩人」である。

使用人のサニーも、「善良ではあるが、あまり働くのが好きでもなさそうな、のつそりした態度」<sup>22</sup>を持つ人物である。仕事や小さな利益を与えれば、すぐに有頂天になる。打算的ではあるが、決めた話と違うことをけろりとやってしまうような「だらしのない」性格の持ち主として造形されている。そして、仕事ぶりときたら、あきれるほどのいい加減さであったという。

いつたい、マライ人といふのは、一般に男でもその程度に頭が低い。高等の教育を受けてゐる者は、極めてまれである。男でもさうであるから、女の頭脳の程度など知れたものである。単純で、素朴だから憎めないが、勤労精神といふものが殆んどなく、気が善くて、おしゃれで、金でもはいると、すぐに化粧品やサロン（腰巻き）を買つてしまふ。

23

中村は、作品において描出した「マライ人」の人々は、いずれも明らかに「僕」と日本軍に対して善意と好感を抱いているように描いている。しかし、その様子を力関係の構図から見れば、日本軍としての「僕」と、使用人「サニー」「サーラム」は明らかに支配と被支配の枠組みの中にいる。マライ民族の善意的な態度の中に、利益と権力が介在していることが暗示しているのである。

「僕」と「マライ人」の間に利益関係が介在する限り、そこには、友情や同情以前に、あくまでも上と下の関係、階級が厳

---

<sup>22</sup>前掲書、中村地平「サニー」p42

<sup>23</sup>前掲書、中村地平「マライの女達」p209

然と存在しているということである。「去勢された」「マライ人」を目の当たりする「僕」はいつも苦笑しながら、彼らに対して「寛容」の眼差しを向けている。この寛容の眼差しが指し示すのは、植民地支配の構図における上下関係である。しかし、「森の中の歌」で描かれた「アブバカ」一家は、友達として「僕」を招待する。こうして、上下関係の枠組みから逸脱した稀の例が有することも見逃せない。

### 3.2 「インド人」

中村地平はシンガポール滞在の三ヶ月間、インド語新聞を指導したこともあり、『マライの人たち』の中で、「僕」の部下に当たる「インド人」を描写する箇所は比較的多い。これら作品の中で、「インド人」の素朴な姿があり、同時に研究心に富み、学識的な修養が高いと描写されている。それらの「インド人」は常に「日本の軍事行動に協力」し、「日本軍のはなばなしい戦果を、まるで自分のこと、そのままに喜」<sup>24</sup>ぶという。

「敗残の敵」では、「印度人中尉は僕の前に来ると、直立不動の姿勢をとり、軍隊式の敬礼をした。まるい、愛嬌のある日本人のやうな顔をしてゐた。」インド兵はイギリス軍隊の下で働くより、「皮膚のいろがおなじい日本軍に従ふことを望んで」と語った。「インド人」捕虜は日本軍に対して「敬や敬やしい態度」をもって、「印度人捕虜が太郎、二郎、三郎といふ日本名をつけて貰つて、喜喜として働」き、日本軍関係者に面しては、

---

<sup>24</sup>前掲書、中村地平「印度人の友」p98

いつも「恐る恐る」、「恐縮さうに」言動していると描写される。

炊事のために雇った「インド人」少年は、自分たちが町を離れるとき、「いちらしい位別れを惜み、僕たちの自動車の側を動かうとしなかつた」という親日的な態度を示したと書かれている。

「インド人」の秀麗な顔を言及し、インド婦人の接待ぶりは「日本婦人のそれにそっくりであつた」と述べるし、静かで控えめで「風紀が正しく、家庭的で」旦那を立てるところなどを評価し、「マライに於ては、印度婦人が第一」と賞賛する。作中の「インド人」は同僚、捕虜、使用人、婦人など多面的に現すにもかかわらず、すべてが親日的で、日本軍を畏怖しながらも日本に興味を持っている共通点に収斂していく。

### 3.3 「支那人」

前述したように、「素朴なマライ人」「親日なインド人」に対する「狡猾な支那人」という造型は、帝国内部におけるステレオタイプの流用を物語るものであり、民族ごとに分節化された言説のパターンを示している。しかしながら、「支那人」華僑の勤労精神、「仕事の能率」の良さ、教養のあることは、中村も「日本内地の人たちに向かふの実情を」伝える「責め」からして語らないわけにはいかなかった。

一体マライでは、馬來人よりか支那人の方が数が多い。マライで最も多くの人口を占めてゐるのは、支那人、華僑である。(略) 政治的にマライを支配してゐるのはイギリス人



であるが経済的にその半島を支配してゐたのは支那人であつた。だから彼らのある者は毛唐に負けないほど、あるひはそれ以上に生活程度が高く、一般に女性の教養の度もマライ人とは比較にならないくらい高いのである。<sup>25</sup>

南方に徴用された「僕」にとって、友情のような感情を抱いて交際した現地人は、「支那人」梁兆鴻ただ一人であつた。梁のことは時々日本語の音読みで「リヨン」と記している。彼のために二編の随筆「支那人リヨン」「梁兆鴻のこと」を書き、内地に帰還した後も、「昭南にゐたころ交際してゐた支那人梁兆鴻の印象が、今もつて僕は忘れがたい」<sup>26</sup>と語っている。

梁は新聞社のカメラマンで、撮影も絵描きも好きで、「僕」と文学を語ることもあつた。ある日、座談会で梁は「ただ一人の現地人として」「内地から特派されてゐる各新聞社の写真班員たち」に混ざって写真をとるが、「傍らにたつてゐた内地人の写真班員が、なにか日本語で罵りの声をあげるとはげしい勢ひで梁の横面をなぐりつけた」。そのときは「僕」等宣伝班員の調停で内地人写真班員は「淡白に、悪びれず」に梁に謝った。この事件で明らかになるのは、内地人が現地で威張っている様子、そして内地人が挑発した衝突事件において、明らかに「僕」が内地人を非として、梁の味方をしていることであつた。

南方徴用作家たちはつねに現地人よりも上位に立たされ、彼らとの間にはいつも無形の壁が立てられていた。彼らは、眼に

---

<sup>25</sup>前掲書、中村地平「マライの女達」p211

<sup>26</sup>前掲書、中村地平「梁兆鴻のこと」p253

「卑屈な媚びをうかべ」、「鷹が餌物でもねらふやうに、日本人が声をかけてくれるのをまつてゐる」「敬や敬やしい」態度の現地人に囲まれて暮らしていた。

さういふなかに在つて、梁の態度だけが、ちがつて見へた。

自分の氣品といふものを喪はず、それでゐて日本人に対しては忠実で、仕事にも心を打ちこんでゐた。さういふ梁に、僕はひそかに好意をかんじてゐた。<sup>27</sup>

このように、「僕」はますます自分の友人「梁」の卑屈さのない態度に関心を増していった。とくに「支那人」との関係は、中日戦争の影響もあり、他の現地人よりも複雑な様態を示していた。中日戦争の最中の文壇で、「支那人」の良さを題材にするのは滅多にないことであつただろう。しかし、「僕」は「支那人」リヨンに対しては文人としての共鳴を感じた。この「支那人」は支配者として占領地に臨んだ「僕」にとってたった一人の現地人の友人であつた。

#### 4. 社会的権威の記号

階級の上位／下位とは異なり、経済、言語、文化などの社会的権威の記号はしばしば優位／劣位の関係になりうる。南方に赴いた日本軍は支配階級として上位に位置してはいたものの、経済力では常に優位に立っていたのではなく、場合によっては現地人に比べて劣位に立たされた。とくに公用語を英語と決めた結果、言語能力は普段の日常生活から英語を使っている現地

---

<sup>27</sup>前掲書、中村地平「支那人リヨン」p242

人とは比較にならなかった。また文化面も、宗主国のイギリスを越えていると言えるかどうかを、現地民から疑いの目で見られていた。もし支配上の威信が欠けていた場合、それは当然徴用作家にも跳ね返ってくるわけだが、もしそうなれば、彼らは自らの位置の不安定さに動揺し、何らかの心理的軋轢を抱え込んでしまうことにもなりかねなかった。

ところが、階級が上位とはいえ、経済、文化の面でたとえ宗主国イギリスに負けることがあっても、国威宣揚という任務を負っている徴用作家はそれを否認せざるをえなかったし、あくまでも自民族の優位性を宣伝しなければならなかった。権威者として南方に臨みながらも、威信不足の窮境に陥り、自らの権威付けに苦しんでいる「日本人」の姿が「印度人記者」では浮き彫りにされている。「印度人記者」の中で、「僕」は「インド人」に「日本で一番高く、大きいビルディング」と聞かれた時、「フジヤマより高い」と答えた。「フジヤマだつたら、誰でも知ってゐる。相手は僕の言葉に感心しきつた顔をして、僕のデスクからはなれて行つた。」

国威宣揚の使命感からか、ついとんでもないことを吹聴してしまった「僕」だったが、その後、「故国を遠くはなれ、僕などのやうな任務に在る者が、現地で日本事情を紹介するとき、ついお国自慢が出るのは、人情の常としていたしかたがない」と、いささか自己弁護に聞こえるような説明をさせている。

つまり、意図して相手をだましたのではなく、ただふと「そんな錯覚」に落ちこんだのだと「僕」に解釈させている。「僕」

の弁解を図ろうとする姿は、現地に上陸した日からいきなり背負わされた権威ばかりではなく、自分が上位階級に位置づけられているという虚像をある程度自覚していることを裏付けものである。

#### 4.1 「死んで生きて行く」決意

当時の徴用作家は、「大東亜共栄」の宣伝のために送り込まれたことを無論承知していた。乗船した「アフリカ丸」が熱帯的な風土に近づくにつれ、中村の脳裏にも、これからやって来る徴用作家としての任務の重みが不安とともに押し寄せてくるようになってきた。

中村地平とともに徴用作家として南方へ向かった井伏鱒二によれば、大阪からサイゴンまでの輸送船の上で、中村は心の安定性をなくし、ノイローゼのような状態であったという。

徴用で南方へ行く輸送船のなかでは、とめどもなく鼻汁を流して大声で泣き叫んだ。「井伏さん、井伏さん……」と私を呼んで、「助けてくれ。海へ飛び込みそうだ。僕を縛って下さい。早く早く。縛ってくれなければ、飛び込んでしまう。」<sup>28</sup>

中村の精神状態は、戦争の暗影、つまり死への不安が兆していたことに起因するだけではなかった。中村は「シンゴラまで」で「戦争には過剰な観念は、百害あつて一利がない」といい、

---

<sup>28</sup>井伏鱒二「南方ぼけの頃」『井伏鱒二全集』第十二巻筑摩書房 1968年1月 p401

「僕たち」は一刻もはやく仕事に没頭し、「過剰な観念を切りすてたい」と回想している。当時の徴用作家たちが戦争に対して「過剰な観念」を抱き、精神的に悩んでいたことを物語るものである。また、マレーの報道班第二部隊に属した神保光太郎は、中村の第一部隊に継いでシンガポールに上陸したが、久しぶりに中村に会った際、「ねえ。一度死ぬのだ。死んで生きて行くより道はない」<sup>29</sup>という言葉をかけられたことを回想している。

中村にとって、南方への徴用は、おのれの精神を傷つけ、死の不安を匂わせるものであった。「死んで生きて行く」道というのは、自分を一度捨てるという覚悟だとも受けとれる。しかしながら、中村の戦時下の作品には、そこまでの決意にあふれた文章は見あたらない。検閲下では、もちろん植民地批判は容認されるものではなかったが、戦争の神聖性、意気や決意などが見られるわけでもない。作品は、ユーモアを交えた淡々としたものであり、現地人の素朴さを記述することが基底になっていた。

当時の徴用作家は宣伝班に所属していたために内地のニュースや戦況を早く知ることができたが、実情を隠し、ひたすら国力を宣揚しなければならない立場にもいた。中村は徴用されて南方に行く前から、死の手が迫ることに不安を感じ、任務に着くことで「安定の生活」を送りたいとも望んでいた。しかし、任務に従事しても、戦況が気にかかり、決して不安を拭い去ることはできなかった。

---

<sup>29</sup>神保光太郎「じへいさん」『中村地平全集』第二巻月報 1971年4月 pp.3-4

#### 4.2 「誇り」の動揺

国威宣揚の任務に当たれば、徴用作家も、植民地の人間のことを、支配国日本の書物や日本の文化を乞い求めるような存在として描き出さねばならなくなる。中村もその例外ではなく、「さいきん、この町では支那人、印度人、馬來人たちの間に、日本語熱が猛烈な勢ひではやつてゐる」と「僕」に語らせる。しかしその一方で、中村は、「現在、僕たちはある種の権威者としての立ち場にたつてゐる、そして、この土地に住む住民たちは、僕たちが言ふところを理解することなしには、日常に非常な不便を感じる。ただ、それだけの理由が、僕たちの拙い英語をこの土地で通用させてゐる」といい、自分の「昔習つた僕の甚だしいブローケンな英語」を自覚しつつも、それを現地で用いなければならない心境を語っている。

ある日、「ミス・エレシイ」なる女性が仕事を求めに「僕」の務める新聞社を訪ねてきたが、宣伝班は女性を雇うことはできないという規則があったため、「僕」は彼女を「僕」個人の英会話の教師として雇うことにした。「僕」はこの女性から「あなたの英語の発音は、大變わるいですわ」とその発音の悪さを指摘される。

彼女の批評は正しかつた。しかし、僕はむつとした。(中略)僕はいくらか憤然として答へた。「さやう、僕の英語の発音は、大變わるいにちがひない。何故かならば、僕は日本人だからである。日本人にとっては、英語は一時の必要にすぎない。英語は今や死語である。近いうちに、英語は

この世界から消滅するにちがひない」僕の見幕にエレシイ  
はあつけに取られてゐた。<sup>30</sup>

英語力の不足を指摘されることに起因した不快感は、『マライ  
の人たち』において何度も「僕」に語らせている。

前にも一度この土地の印度人が、僕に気の毒さうに言つ  
たことがある。「あなたは英語があまり上手ではありません  
ね」その時、僕は不機嫌に答へたものであつた。

「アイ、アム、ナツト、ア・ブリイツテイシユ。アイ、  
アム、ア、ニツポニイズ」<sup>31</sup>

異民族を教化する上で、社会的権威が最も顕在化しやすい記  
号は言語だといえる。なぜなら、言語ほど異民族との間で、異  
化や同化の象徴になりやすいものはないからである。そして、  
安定的な植民地支配を遂行するために、支配者としての威信が  
必要とされるかぎり、指導的立場に立たされた徴用作家は常に  
「日本人」の「誇り」と「責任」を念頭におかなければならな  
かった。異民族にその「誇り」を伝達することこそ彼らに求め  
られたことであつたからだ。

となれば、自民族の「誇り」をよりいっそう強化しなければ  
ならない必然性が生じる。なぜなら、南方占領地での「公用語」  
を英語に統一した以上、敵国語を使う矛盾、宗主国と現地民と  
の英語力の差をどのように克服するのが大きな課題となつて  
くるからである。英語の発音が悪いと現地人に指摘され、「気の

---

<sup>30</sup>前掲書、中村地平「ミス・エレシイ」pp.118－119

<sup>31</sup>前掲書、中村地平「印度人記者」p88

毒さう」に見られることは、優劣関係の逆転を意味するからこそ、「僕」は過敏なほどそのことに不機嫌になったのである。

見逃すことができないのは、中村が、「僕」が自らの英語の発音の悪さを指摘されることに敏感になっている姿を冷静に描き出す一方で、「一般的に言つて、もちろん言葉といふものは、常に政治力によつて左右される。政治力と権力さへ伴へば、言葉はどんな世界の隅にでもひろがつてゆくことができる」と言語と権力との関係を冷静に見すえていることである。

このような見方は、実は中村だけではなかった。日本語教育の普及を図ろうとして、軍部はシンガポールも「昭南日本学園」を創設したが、その日本語学校の学長を務めたのが神保光太郎である。神保は教員に対して、「大和民族が、彼らに数等すぐれてゐるもの」で、「相当遠慮なく、彼らを指導して行うて良い」と、自信を持つように求めた<sup>32</sup>。これらの神保の努力は、現地に赴いた「日本人」に指導民族たるに相応しい理由が欠乏していたこと、そしてそのことに彼らが動揺を感じていたことを逆に証言している。

#### 4.3 帰還途中での感想

日本への帰還の途中で、「僕」は高雄に上陸し、旧制高等学校時代の旧師を訪ねた。バスを待っている長い列のなかで、彼は「自分の心が異常に和んでくるのを覚えた」。「まるで温泉にでも浸つてゐて、体の疲れがほぐれでもしてゆくような快感」を

---

<sup>32</sup>神保光太郎『昭南日本学園』愛之事業社 1943 年 8 月



感じたのである。そして「僕」は、その快感の原因を「自分のぐるりにゐるのが日本人ばかりのせゐである」と述べている。

しかも、それは単に異民族の暮らす場所から自分と同じ民族の住む場所に戻ったことからくる感嘆というだけではなかったようである。そもそも、平民同然にバスを待つという行為自体、南方の現地では体験しなかったことである。さまざまな特権的地位から下ろされたからこそ、やっと肩の荷がおり、ふたたび人と人との対等な関係にある場所に戻されたように感じたのである。その場所は「日本人ばかり」の「温泉」という比喻を借りることで、万人平等の「平凡」な場所性を表していた。ここでいう「平凡」というのは、現地にいた徴用作家にとっては、真の自分を取り戻せる、願うばかりの「日常」のことであつた。

追想してみると、馬來にゐた間、僕は瞬時も緊張から心が放たれたときはなかつたやうである。そして、それはその土地では四六時ちゆう、支那人、馬來人、印度人、泰人、ユーラシヤンなど、種種雑多な種属にとりかこまれてゐて、はつきり意識したわけではなかつたが、僕などでも現地民、つまり異民族に対し、指導民族としての誇りと責任を強く感じてゐたためであらう。<sup>33</sup>

「異民族に対し、指導民族としての誇りと責任」を感じていたという認識は、無論、民族の非対称性という植民地言説にコミットするものである。被指導民族を文明化する使命をになうことが正当化されることで、当然のことながら、そこには従属

---

<sup>33</sup>前掲書、中村地平「帰還の感想」p270

を迫る暴力が発生する。しかし、上述の引用からは、権威者という位置に配置されることや、指導者の体裁をとることは、徴用作家にとっては決して格段に心地よいものというわけではなかったことがわかる。

ここから見れば、「国威の宣揚」という課題が追求された宣撫工作の日々は、彼らにとっては重荷であったし、苦痛でもあった。南方へ派遣された作家の、多民族、多文化の植民地で異民族を教化することに「疲れ果てた」という声は、東亜共栄のスローガンとの不協和音を示すものであったのかもしれない。

## 5. 結び

中村地平の『マライの人たち』は日本軍と現地人との親しさや町の平和な様子を描き、「東亜共栄」、イギリスの敗戦、そして日本軍の力を宣伝する言葉までも書き込んでいる。だが、彼は平和な町の風景というプロパガンダそのものの表面を描くと同時に、常にその側面に付随せざるを得ない権力の存在を、さらにはその基底に埋め込まれている戦争の実相をも作品中に提示しているのである。

徴用作家の宣伝任務は、もちろん軍部の監視下に置かれていた。支配者として赴いた徴用作家たちも、帝国の支配下にあり、その意味で言えば、一種の被支配者であった。そして、内地の民衆への意識も加わって、常に重層的な監視網に置かれているとの認識は、徴用作家に精神的な苦痛をもたらし、作品の性格にも大きな影響を与えた。

中村地平は帰還後、南方徴用を次のように振り返った。

今回想してみると、現地人との接触面に於て、馬來に於ける僕自身の存在が、本質の自分よりかはるかに過大であつた、日本内地に帰つてみれば、そんなに大きな自分など、どこにも見出すことはできない、そのことに妙な、照れくさい、気恥しさを感じます。<sup>34</sup>

その上で、「僕は現在マライに住む現地人たちが、どんなことを考へ、どんな風に生きてゐるか、それを作品に書き、日本内地の人たちに向かふの実情を知って貰」<sup>35</sup>いたいのだ、と決意を表明する。

イギリスが敗退した後、東南アジア占領地での日本の最大の強敵は現地民衆の抵抗であつた。日本当局が現地民の人心収攬をはかる一方で権威をもって威嚇もすることも辞さないという手段をとったことによって、徴用作家たちも現地民に好意を寄せながらも差別的な態度をとらざるをえなかった。その中で展開される、「素朴」という表象にしても、それは「幼稚性」や「未開性」と地続きの差別的な眼差しの効果であつたし、勤労意欲が高い、知識欲がある、教養がある、家庭的であるなどといった美德の顕彰にしても、つまるところは「自民族中心主義」に基づいた、「日本」という自己像の顕彰を形を変えて行っているに過ぎなかった。民族間の文化差を架橋するために行なわれた占領であると自称しているにもかかわらず、異民族の野蛮さ、

---

<sup>34</sup>中村地平「帰還後の感想」『船出の心』文林堂 1943 年 11 月 p304

<sup>35</sup>同上注 34、p306

素朴な面を誇張し強調して語ることに終始するだけであった。これは南方占領を目指すために日本がとった戦略の一環であったが、このような眼差しに基づいて南方で「大東亜共栄」を叫び、アジアの異民族を差別しながら連携を図ろうとするところに矛盾が生じた。

「植民地言説の目的は、植民された人々を人種的起源に基づいて退化＝変質したタイプの住民と見なすことであり、それによって占領を正当化し、統治と教育のシステムを確立しようとする」<sup>36</sup>ことだと言われる。日本は明治維新以来、西欧に習って軍事力を急速に強化したが、欧米のように正面から「支配－被支配」の構図を「文明－野蛮」という二項対立図式にそのまま当てはめることは困難であった。そもそも東南アジア各国の米英からの「解放」と自主独立を唱えながら、それらの国々を自国領土へ編入していったことから矛盾は明らかである。

ところが、徴用作家はこのような状況の下で現地に派遣され、いきなり現地民に対して旧宗主国よりも文化的優位にたつ日本を説得するという任務を担わされた。いわば南方民族に対して支配者としての威信を確立しつつ、欧米人に対しては文明国の一員であるという威信を誇示し、それらを作品に書き込むように要請されたのである。徴用作家としての中村地平も、南方植民地では支配者の一員として、支配－被支配の構図を構築していく存在であったが、それと同時に、「支配者の中の被支配者」

---

<sup>36</sup> ホミ・K・バーバ／上岡伸雄訳「差異、差別、植民地主義の言説」『現代思想』1992年10月 p65

として帝国の支配下に置かれた存在でもあった。かつて原住民の文明教化を否定する意見を表明したものの、原住民の教化に鞭をふるう指導民族の立場に立たされることになった。その徴用期間は、指導民族としての体裁を取り繕う日々でしかなかった。

徴用作家は、植民地言説を伝達・拡散する道具として前線に派遣され、植民地の宣撫工作と国内向け報道の役割を与えられ、日本帝国の植民地主義に連合せざるを得なかった。戦時下に言論を支配する暴力性と、無意識的に表れる様々な差別の暴力性は、徴用作家のテキストに共通する前提となっている。中村地平の徴用作家としての作品も、政策にコミットするような植民地言説を取り込んでいるが、被植民者が屈従せざるをえないような権力構造も明白に書き込んでおり、また、作品の平穏な風景の描写の背後に占領地の矛盾が満ちていることも示されている。そして、日本植民地帝国に本来的に潜在している差別や矛盾や亀裂に巻き込まれることで、作家としての内心の軋轢も作品に表面化させている。徴用作家の大きな葛藤は、自民族が他民族より優位に立つことに疑問を感じることに起因している。それは、上位に立つ自己を絶えず相対化し、自民族の位置づけを柔軟に見直そうとする態度につながるものであった。

中村地平は戦時下の数少ない作品『マライの人たち』の中で、確かに植民地を闊歩している徴用作家の姿を描き出している。そして、その姿の背後に耐え難いほどの苦痛が潜んでいたことも描き出している。一人一人の徴用作家が戦争や帝国というも

のに対して、どのような思いを抱き、どのようにプロパガンダの役割を果たしたのか。彼らの作品群に対して更なる検討が必要であろう。

### 参考文献

- 文化奉公会編『大東亜戦争 陸軍報道班員手記 マレー電撃戦』、東京：大日本雄弁会講談社、1942。
- 神保光太郎『昭南日本学園』、東京：愛之事業社、1943。（引用は復刻版、東京：龍溪書舎、2003）。
- 日本文学報国会代表者中村武羅夫編『新生南方記』、東京：北光書房、1944。
- 中村地平『マライの人たち』、東京：文林堂双魚房、1944。
- 井伏鱒二『井伏鱒二全集』第十二巻、東京：筑摩書房、1968。
- 原四郎編、『戦史叢書 大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯』1-5巻、東京：朝雲新聞社、1973年-1974年。
- 川村湊ら編『文化のなかの植民地 岩波講座近代日本と植民地 第七巻』、東京：岩波書店、1993。
- 神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家』、東京：世界思想社、1996。
- 岡林稔『《南方文学》その光と影』、宮崎：鉾脈社、2002。